

令和5年度第2回日野町総合教育会議議事録

1. 日時：令和6年（2024年）2月28日（水） 16時00分～17時20分
2. 場所：日野町立図書館 視聴覚室
3. 出席者
堀江和博日野町長
日野町教育委員会：安田寛次教育長、神川貴子教育委員、
本居節子教育委員、吉澤松美教育委員、村井優子教育委員
庶務：小島 勝企画振興課長、菊地智子企画振興課専門員
澤村栄治教育次長、加納治夫生涯学習課長、長谷川毅図書館長、柴田和英子ども支援課長、
赤尾宗一学校教育課不登校対応担当課長、山中博嗣学校教育課主席参事、角浩之学校教育
課主任、森なつき図書館主任
4. 傍聴人 0人

開会 （企画振興課課長）

町長あいさつ

協議事項

【町長】

それでは協議事項に入らせていただきます。

「(1) 日野町立図書館の現状と今後について」を、事務局の方からお願いします。

【図書館長】

皆さんこんにちは。日頃、図書館の事業説明をする機会がないので、今日は貴重な機会だと思って、いろいろ報告させていただきたいと思います。

協議事項「図書館の現状と今後について」ということですが、現在図書館協議会のなかで今後10年の日野町立図書館のあり方ということで議論していただいています。今回はそれについて、森主任の方から説明させていただいて、後に私の方から、今年度から居場所づくりということを行っていますので、それについてのご紹介と、報告をさせていただきたいと思います。ぜひご意見をいただきたいと思います。

【森主任】

皆さんこんにちは。図書館の森と申します。

本日は、追加で配らせていただきました「日野町立図書館のめざすもの ―これからの図書館のあり方について―（案）」、こちらの方について説明をさせていただきます。

「日野町立図書館のめざすもの」ということで、日野町立図書館では平成24年に当時の図書館長から諮問をさせていただきまして、平成26年3月に図書館協議会の方からの「日野町立図書館のめざすもの 今後10年間を見通した図書館サービスの方向性について」という答申の提出がありました。

平成27年度からはこの答申に基づきサービスを実施してきました。

答申期間である 10 年が経過するなかで、社会情勢が変わり、図書館についてもニーズの変化や役割の多様化などがあり、あり方を見直す時期となったことから、今後の図書館のあり方について図書館長の方から諮問をいたしました。

こうした経過については、「1. はじめに」の方でまとめてあるのですが、諮問した項目については、一つめが「情報環境の変化に合わせた情報提供サービスの構築」、二つめが「住民活動を支える環境整備」、三つめが「多様なニーズに対応し、誰も取り残さないサービスの充実」、四つめが「地域の歴史文化資源の収集・保存・活用」、五つめが「子どもの読書活動推進」の 5 項目になります。

2 の「(1) 図書館の現状と利用状況」では、直近 5 年間の蔵書や貸し出し、利用人数などの実績についての説明となっています。貸し出し冊数や利用人数については、現在は利用減少傾向にあることなど説明しています。

5 ページからは町立図書館の課題について書いています。この課題については平成 26 年の答申のときに、個別課題という形で提示されたものに沿って説明しています。項目ごとにどれだけでできているかということに違いはありますけれども、いずれにしても不十分なところがあり、課題が残っているというのが全体を通しての現状となっています。

7 ページの「3. これからの図書館に求めるもの」は、協議会から示される今後の図書館のあり方になっています。

各項目に書かれている内容について、ごく簡単に説明をいたします。

「(1) 住民の暮らしを支える情報の提供」は、公共図書館の基本的な役割である、資料や情報の収集、保存、提供と、また新たな役割である課題解決型の図書館、地域活性化のためのビジネス支援などが必要となっていることについて書いています。

「(2) 日野町のどこに住んでいても利用できる全域サービスの実現」は、前回の答申でも個別課題となっていました。こちらの方はスマートフォンの普及など社会情勢の変化により、非来館型サービスなど新たな内容が追加となっています。

「(3) 情報環境の変化に合わせた情報提供サービスの構築」では、スマートフォンの普及により、住民が情報にアクセスする方法にも大きな変化がありました。現在は、いつ、どこでもインターネットにアクセスすることが可能な時代になっています。図書館でもそうした変化に合わせたサービスの提供ということが必要になっています。

「(4) 住民活動を支える環境整備」では、第 6 次総合計画にもありますように、まちづくりに寄与する図書館として、地域の課題解決や住民活動の支援など、図書館が担うべき役割であったり、それから更なる取り組みというものの充実というものが求められています。

「(5) 多様なニーズに対応し、誰も取り残さないサービスの充実」では、障害者や高齢者、それから外国語を母語とする方など、住民のなかには図書館を利用しづらいという方もいらっしゃいます。図書館の資料についてはそういった方にもご利用いただけるように、サービスの充実をはかる必要があります。

「(6) 地域の歴史文化資源の収集・保存・活用」では、日野町の地域文化の発展、創造に寄与するため、商人館やふるさと館とも連携し、日野町に関する資料の収集と、また多様な利活用ができるよう進める必要があります。

続いて、「(7) 子どもの読書活動推進」では、子どもの読書環境の整備や幼稚園、保育所、学校への支援と連携などにより、子どもが多様な本に出会う機会の提供や、子どもの自主的な学びを支援する学校図書館づくりへの支援が必要になっています。

「4. まとめ」では、これからの図書館がどうなってほしいかということで書かれています。

開館以来、住民がいろいろな形で図書館を利用することで、現在では図書館がある日常というのが

普通になっています。しかし、その間に起こった社会の様々な変化のなかで、図書館の役割や求められるサービスも変わっているということ、そうした変化を敏感にとらえ、将来を見越した新たなサービスを提供するなど、より便利で利用しやすい図書館となるよう積極的に取り組んでほしいと考えています。住民の知りたい、学びたい気持ちに応えるため、司書には専門性を高め、住民の求めるサービスを提供する図書館、本との豊かな出会いのある図書館をめざし、努力することを望みます。

たくさんの住民が気軽に立ち寄って本を借りたり、情報を探したり、図書館で出会った人たちが意気投合し、そこから何かが始まるような、住民にとって使いやすく親しみやすい、地域に寄り添う図書館となることを期待します。

関係各位には、答申の趣旨を理解し、これから10年の図書館サービスがより良いものとなるよう、方向性を定めていただければ幸いです、とまとめられています。

「5」以降は参考資料や検討日程、答申を協議した図書館協議会委員が記載されています。

この答申については、現在の委員の任期である7月末までに提出できるように現在検討をしているところであり、今後修正をして確定をし、図書館長へ提出をしていただく予定をしています。

またこちらの方にはもう少し詳しく、なぜそうした取り組みが必要なのか、説明しています。また確定版もお配りすることになるかと思いますが、こんなふうなことが今求められているんだな、ということを知っていただく参考にもなるかと思いますので、また後ほどご覧いただければ幸いです。私からの説明は以上となります。

【図書館長】

続きまして、私の方から今年度の事業ということで、説明させていただきます。

「子ども・若者の居場所づくり」ということで、実際は昨年9月1日から始めた事業であり、内容については、私が滋賀県の社会教育委員になっていることで、県の社会教育委員の研修のなかで発表した内容をもとに、今日は少し説明させていただきたいと思います。

初めに、皆さんご存知の第6次の総合計画のなかで図書館がどういうことをめざしているかいうことを改めて話をさせていただきたいと思います。

図書館では、「新たな創造が生まれ誰もがいきいきと暮らせるまち」をめざす姿としています。基本的にはこの第6次日野町総合計画の図書館のめざす姿をいかに実現するかということで、各事業を実施しているところです。

そのなかで、これからの時代に求められる図書館のあり方で、今までは本を貸し出す、基本的な図書館の機能ということですが、情報提供サービスというのは、それがどのように住民に及ぼすものであるかということがここに書かれているところです。住民一人ひとり、またはコミュニティの活動を支援するエンパワーメントですね。こちらをベースにして、最終的には持続可能な地域づくりに繋がるよう、図書館がいかに地域に貢献していくかということがこちらに書いています。

その中で司書の役割としては、地域の人を結びつけるコーディネーター、情報と人、知識と人、人と人とを繋げるコーディネーターの役割が司書に求められているということです。

ここでちょっと耳慣れない言葉で「エンベディッド・ライブラリアン」というのが書いてありますが、こちら直訳すると「組み込まれたライブラリアン」ということですが、これはどういうことかというと、そのコミュニティに踏み込む、コミュニティと一緒に活動していく、図書館から出て活動の場に身を置き、参画協同しながら、そのなかで図書館のサービスを行っていく司書のことを、エンベディッド・ライブラリアンということになっています。

続いて、この居場所について以前からいろいろなところでお話しているように、そもそも図書館の課題かなということで、特に中高生の利用割合が非常に少ないということで、多くの図書館がその対

策にブックリストを作ったり、中高生向けの棚を作ったりしています。でも実際にその中高生に届いているかということの分析はできていない状況であります。

またアンケートやヒアリングで、中高生の年代の声を聞くということもあります。でも実際はそういう場で高校生の本音が聞けるかというと、なかなかそうはなっていない状態です。

そこで町立図書館としては、やはり声を聞こう、イベントなどではなく普段の日常の声を聞こうということで、今年度始めた一つに図書館クラブがあり、1年間を通じて図書館を活動の場にするということを事業としてやっています。

こちらについては、イメージ的には図書委員会とか、図書館を活かせる部活ですね。それを1年間通じて、子どもたちのやりたいことを図書館で実現する。それを目的に子どもたちのクラブ活動を図書館の場にして始めています。決まりは三つだけで、「とにかく楽しもう」「お互いの意見を尊重しよう」「みんなが居心地の良い場所にしよう」という、この三つの決まりでやっています。この図書館クラブというものが、今年度やった中で非常に子どもたちの生の声を聞く機会になっていると思います。

今年度の一つの事業で「図書館を使った謎解き大会を」というような声があり、子どもたちの発案で子どもたちが作ったクイズを、12月24日、その図書館クラブが自主的にスタッフとなって運営をするという謎解き大会をやりました。子どもたちは非常に充実感で喜んでいましたし、参加する子どもたちも非常に喜んでいました。

続きまして2点目が、若者の居場所づくりです。「子ども若者プレイス」ということで名付けていますが、こちらは毎週金曜日午後2時から9時までということで、視聴覚室を開放してやっています。

こちらも、従来は居場所というと、子どもたちが自習スペースなどに入り自由に勉強してというものでしたが、そうではなく、居場所を通じて図書館員が日頃から関わる、特別でなく日常の居場所になることで、子どもたちの声を拾う、子どもたちの声を聞こうということで始めています。

その中で、ある高校生がこういうことを言いました。「日野町には僕たちが気軽に集まれる場所がない。僕らは中学校を卒業したらバラバラになる。図書館がもし居場所になれば集まる場所にもなるし、誰かにそこで出会う機会が生まれるかもしれない」と。「そういった機会がこの図書館という居場所があることによって生まれるということは、非常に良いことだ」というような話を聞きました。

これは実際のこの視聴覚室での様子です。おすすめのブックガイドなどが置いてあるのですが、ポイントとしてはメッセージボードというのがあります。子どもたちの「こうやりたいんだ」とか、「こんなものがほしい」というような意見に対して、図書館員が回答するというものです。

例えばライブがやりたいとすれば、どうやればいいのか。誰が言ったかは無記名なのでわからないのですが、どういう曲が弾きたいのか、子どもたちにメッセージボードで聞きます。そうすると「ギターが弾きたいけれど、洋楽のギターの楽譜がない」。では「どういうギターを弾きたいの」と聞くと「テイラースウィフトが弾きたい」と。「だったらテイラースウィフトの楽譜を揃えてあげる」というやり取りが生まれているのです。

こういうきっかけのなかで、本を紹介したり、本と繋がるというきっかけをもらっているのです、このメッセージボードは非常に重要だと思います。

あとは息抜きにカードゲームやボードゲームをしたりしています。高校生もいるし、中学生もいるし、一人ひとりの子もいますし、グループでいる子もいます。居場所のあり方を考える、そもそも居場所ってどういうもののなの、ということを考えて、重要なのは「当事者にとっての居場所を考える」ということで、こちらに紹介しているのはこども家庭庁のホームページなのですが、こども家庭庁ができる前に、内閣府のときに調査報告書が出ました。

このなかでいろいろな内容があるのですが最終的には今日お配りしているような指針が12月に閣

議決定されて、どのような居場所づくりが必要かというところで、居場所の要件というのは、「居たい」「行きたい」「やってみたい」この三つで、多くが居場所の要件を図書館が満たしているということがよくわかりました。

やはりここに来る、いることの意味を問われない。誰が、いつ来ても、また帰っても、出入り自由で、ここで何か言われるわけではないのです。安心安全な場所、居ただけいられる。一人でいても気にならない。別の目的をもった人がいても同じ空間にいられる。気軽に行ける、一人で行ける。お金がかからず、誰でも行ける、いつでも行ける。

「やってみたい」のところにあり、「新しいことが学べること」と、「未来や進路を考える機会になる」、これも図書館に結びつくことだと思います。

このなかで、ユニバーサル／ポピュレーションアプローチと、ターゲット／ハイリスクアプローチなのですが、このなかでユニバーサルな、すべての若者を対象とする居場所で図書館が書かれています。不登校のフリースクールについては、ある意味特定のというか、課題をもった居場所でありすけれども、図書館というのはすべてに開かれた居場所だと分類されています。

居場所にはどんなものがあるのかと考えるなかで、ユースセンターというものが近隣の京都市にあることがわかりました。実際ユースセンターを訪れて話を聞いたところ、ユースセンターでは居場所づくりも行っていますが、子どもたちの自主的な活動の支援や、相談事業のほかに、若者の育ちを地域コミュニティで支える活動、インフォーマルな教育をユースワークと呼んで活動されています。日本ではあまり馴染みがない言葉ですが、欧米ではもう当たり前のようにイギリスでは1960年代からユースセンターのユースワークというのが始まっているようです。「若者にいかに寄り添うのか」若者の自発的活動と若者のウェルビーイングの実現を支援する、そのための人材をユースワーカーと言います。

全国のユースセンターはなかなか数が少なく、代表的なものは京都とNPOカタリバがやっています。いろいろ自治体から受託して活動しているところが多いです。奈良県三宅町のユースセンターは去年できたところですが、ここはある意味直営で、地域おこし協力隊の方がカタリバと連携協定されたところです。このユースセンターに、私は立ち上げのときに行きました。この写真は代表的な尼崎市ユース交流センターのイメージですが、いろんな子どもたちがいて自由に過ごしています。下の三つの写真が交流センターの図書室の写真になります。いかに子どもたちと本が結びつくような形になっているかというのがわかります。

今後の居場所のあり方ということで、これからどのような形を考えていくべきかというところを少しまとめています。第一には子ども・若者と寄り添う。あとは地域とともに居場所をつくる。子どもを主体に、地域とともにつくる。第三者が一方的につくるのではなく、当事者が居場所と感じているようなものをつくるということです。こちらの居場所づくり事業については滋賀県の生涯学習課の補助事業ということで、補助金をいただいています。事業目的のところは、この日野町における居場所づくり事業の目的を書いたものです。

図書館ならではの居場所をつくるということで、「図書館が居場所になることで、本が仲立ちとなり、学び合い生まれ、本が心の支えや新しい価値観や世界を知るきっかけになることは、若者がより良く生きることにつながることを期待される」。こちらが図書館だからこその居場所づくりだと考えています。今後の計画については、こちらは今年度の事業でも行ったのですが、地域における居場所の理解で、地域との連携、ネットワーク構築、交流事業、若者と多様な世代との交流、若者の夢（声）を地域で実現する、若者の社会参加までいけるといいなと考えています。

最後に、地域に多様な居場所をつくるということは、子ども・若者を含むすべての人々の居場所となれるような図書館を考えていきたいと思っています。様々な文科省のプランや、内閣府の孤独・孤

立対策推進法、子ども家庭庁のこどもの居場所づくり指針も、それぞれに関わるものだと思っています。いろんな分野とつながりながら居場所事業を進めていきたいと思っています。

今年度の事業ということで、11月から実際にやっている事業ですが、11月5日については、地域の住民団体、議員、学識経験者、町職員との意見交換をやっています。ユースワークの実践講座ということで、講義とワークショップを行っています。「3.居場所」で、イベントについては、若者と地域の方の交流事業を実際に図書館で行いました。

最後に、ある社会教育史家の言葉を紹介したいと思います。「居場所づくりに期待することが地域づくりに繋がる」ということですね。図書館の居場所づくりをきっかけにして住民主体のまちづくりと、コミュニティに能動的に関わるエンベティッド・ライブラリアン。先ほど紹介したような地域と行動をとるようなライブラリアンの実現をしたいと思っています。

最後に皆さんに資料をお配りしますので、ぜひご覧いただきたいと思います。以上です。

【町長】

ありがとうございました。非常に良い内容だったと思います。

それではもうざっくりばらんに、図書館というテーマでもありますので、日頃思われることでも、今ご説明があったのを踏まえてでも結構ですし、今館長から居場所という、これからの図書館の意味のようなお話もありました。実際にも取り組み始めていただいているわけですが、皆さんが図書館を利用されての具体的なことなど、どんな観点でも結構ですので、いろいろお聞かせいただければと思います。

【本居委員】

私自身の話をさせてもらおうと、うちは子どもたちが本を読むのがすごく好きなので、小さい頃からよく図書館を利用させてもらっていて、今上の子が18歳になったのですが、今でも必ず1日1度くらいは何かしらの本を見ているというくらい、本が好きです。

小さいころも図書館で借りてきた本を寝る前に1冊だけ読むというのが習慣だったので、本にすごく興味をもっていて、小学校ぐらいまではよく週末になると図書館に連れてってほしいと言っていたのですが、先ほども館長の説明のなかであったのですが、16歳から18歳の利用が少ないというところで、うちの子どもの世代だなと考えていたのですが、一番には「行きたいけれど時間がない」というのが大きなところかと思うのです。中学生でも自転車で来ることはできますが、なかなか来たい時間帯に図書館が開いていなかったり、土曜日、日曜日はまた別の用事があったり、部活があったり、そういったことで土日もなかなか来れないとだんだんと図書館が遠のいてしまって、どうしても読みたい本があれば借りに行く時間を何とかして借りられるのですが、できないときは、中学校も高校も学校図書室があるのでそこで借りたり、購入するという方法になってしまうのです。そこで、なかなかその世代の子たちは図書館に来る時間がないのかなというのを、お話を聞かせていただいていたと思います。そのなかでも時間が取れるとすれば、図書館というより先ほどの居場所という位置づけになってくると、子どもたちも少し時間を作って来られるようになるのかなという気がします。

それで言うと、例えば先ほどのゲーム、今はswitchとかそういうのが主流になってくると思うのですが、カードゲームやボードゲームは子どもたちも結構好きで、テレビやテレビゲームがなかったボードゲームなどを出すと、それはそれですごく楽しく子どもたちがコミュニケーションを取りながらできるので、すごく良い取り組みだなと感じています。

私は職場の関係で子ども食堂もさせてもらっているのですが、そのときに子どもたちが集まって何をするかというときに、トランプやオセロなどを家でやったことがないという子どもも結構いて、今

は家でそういうのはしないんだということにびっくりするときもあるのですが、皆でやり始めると、何回も何回も、次やりたい、もう1回やりたいと言って、テレビやswitchなどのゲームがなくても1日ずっと遊べるという姿もあります。そういうところでこの図書館が居場所になっていけると、図書館イコール本を借りる、本を読むところというだけではなくて、プラスアルファ何かあるすごくいいところになって、ここに来れば「いつも何かあそこで見ている子がいたな」「あそこで一緒に遊んでいる子がいたな」とか、「本を読んでいる子がいたな」と人との関係もできたりして、そういうのもまた意味があるのかなと思っています。

私は「ぽけっと」にも居させていただいているのですが、そこにも図書館の本を置いてもらい小さい子ども向けの本を2、3ヶ月に1回更新していただいています。これがお母さんたちから好評ですが、やはり図書館に0歳、1歳などの小さい子どもさんを連れてくるのは困難で、図書館ではうるさくしては駄目だったり、子どもが走り回ったり泣いてしまったりすると、行く前から行きづらいという場所になってしまっていますが、「ぽけっと」に図書館の本も置いていただくと、そこで子どもさんが遊んでいるとか泣いてしまっても本が見られるので「この場所にあるのは、すごくいいですね」とおっしゃられていました。

例えば難しいかもしれないのですが、そこで気に入った本が、「図書館に行かなくても、ぽけっとにある本がここで借りられるよ」というようなシステムがあると、本に触れ合う時間も増えていくのかなと、お母さんたちのお話を聞いていて思いました。

あと「ぽけっと」では月に1回図書館の司書に来ていただいて、絵本の読み聞かせや、ふれあい遊びをしていただいているのですが、それも皆さんに大変好評で、「やっぱり本に触れさせてあげたい」、でも「どういうふうにして」「どの本がいいのか」などわからないという声もありますので、図書館の方が出張していただいて、「ぽけっと」でしていただけると大変ありがたいなと実感しています。

小さい頃から本に触れ合うことは、成長して、例えば語彙力や、言葉の出る数というのは違ってくると思いますので、図書館がすごくいい場所になっていければいいなというのはあります。

【町長】

ありがとうございます。最初におっしゃった、寝る前に1冊読むというのは、何歳くらいからいつまでやっておられたのですか？

【本居委員】

1歳半くらいから幼稚園卒園するぐらいまで。

【町長】

読み聞かせですか。

【本居委員】

読み聞かせをしていました。

そうなってくると聞いている本が決まってくるので、字はまだ読めないのですが、いつも聞いている話を自分で思い出して、自分で話を作って読み始めて、「はいおしまい」と言って、自分で読み聞かせをし終わって、今度は逆に親が読まなくても自分で読んで寝るということになりました。

子どもにもよると思うのですが、うちは私がこれを読みなさいと言ったことはなくて、自分たちがほしい本を読むようにしていて、日野町は貸出冊数に制限がないので、すごくありがたいです。子どもたちは読みたい本をとりあえず全部借りて家に帰って広げて、そのなかで自分たちの好きな本

を見つけていくというのを小さい頃からしていたら、自然に好きになっていきました。

【町長】

神川委員さんはそのあたりはどうでしたか。

【神川委員】

うちも小さいときは保育園で絵本 100 冊運動というのがあり、読み聞かせをした本をリストアップしていくものをやっていたのですが、やはり子どもによって興味のある子とない子が出てきました。

【町長】

全体的に聞かれてどうですか。

【神川委員】

この中高生の居場所づくりの、ある高校生の声のところはすごく共感できると思いました。日野町は子どもが集まれるような場所が本当にないので、こういう居場所ができるのはすごくいいなと思いました。今の中学生も部活に入らない子も多くいて、寄道禁止ですが、そういった子も学校帰りに立ち寄れるようになると、また部活とは違う、部活に入っていないくても違う世界が広がるのかなと思いました。

また、子どもの絵本離れが進んでいるようで、買っても破るから絵本を置かない家が多いらしいです。園では読んでもらっていてもなかなか家で読む機会がないらしく、図書館の本に触れる機会は大事だと思います。

私も今回、本を借りに行ったのですが、小さいお子さんを連れている方は、子どもがパーっと動き回ったり声を発すると「しいー」と言っておられて、やはり子どもを連れて来るには来づらい場所で、私も子どもが小さいときはそういう感じだったので「絶対静かにするんやで」と外で言い聞かせてから入りました。子どもを連れて入りやすい雰囲気になると、もっと子どもが小さいうちから来やすいのかなと思いました。

【町長】

今お二人からお伺いすると、図書館は若いユースの世代の居場所的なところであったり、大前提として「絶対に喋ったらあかん」、そういうのがありますね。その辺は何かありますか。

【図書館長】

特に図書館としては「しいー」とか、静かにしてもらいたいというようなことは言ったりもしないですし、態度にも表してはいないです。おそらく、何というか常識的な感じに、日本の図書館では静かにしなきゃいけないものと思われている方が多いかと思います。そんなことはなくて、うちは音楽もかけていますし、割と夜だと実験的にジャズを流したこともあります。なぜかという利用者の方々に音に寛容になってほしいので、そういう試みというか、音を出すということも結構しています。うちの図書館はやってはいないですが、例えば岐阜の市立図書館は、「子どもの声は未来の声」という標識を作っているの、そういうのもいいのかなと思うのです。

子どもの声も寛容になってもらうというか、そういう標語づくりも有効なのかと思います。基本的に公共の場なので、お互い考えながら過ごす場所なので、と思っています。スペースをシェアするわけですから、お互いさまというのでしょうか、そういうスタンスで図書館は思っているの、そんな

に気にすることはないと、あちこちで言っていたいでよいです。

【町長】

村井委員さん、いかがですか。

【村井委員】

図書館の利用の方法っていうのを思い起こしていたのですが、学生の頃、図書館は本を借りに行くところではなくて、勉強しに行くところでした。学校帰りに図書館でちょっと勉強して、同級生とお互い教え役をしたりして、本当にシーンとしていたんですよ。音楽も鳴っていなかったし、今館長さんが話されたのを聞いて、日野の図書館も最初はなかったと思うのですが、最近鳴っているなど今気がつきました。それを聞きながら本を探している自分がいたので、図書館っていうのはずいぶん様変わりしたんだと。それで、そのお子さんの声というのも、やはり大前提で静かにしなきゃいけないというのがあったから、時々気になることはありました。でも「お互いさま」というのがあったから、結構母親目線で、スルーできていたのです。

この日野の図書館が中高生の居場所にしようっていうチラシとか見て、「すごいことをやっておられる」と思いました。今日いろいろ教えていただいて、質問なのですが、それをやって子どもたちはどう変わってきたのか、そして、ここに来ることによって、本の貸し出しの方にも興味を向けてくれたのか、ということをお聞きしたいです。

それと、図書館に来ると、いつも大体同じ高齢者の方がおられます。寝ておられたり、新聞を読んでもおられたり、そういう方々にも居場所になっているのかなというのを感じました。だから、高齢者の方についてはどうなのでしょう。やはり若い人の方がこれからがあるし、そういう目を向けていかなければならないのでしょうか。

ちょっとそのあたりが気になって、その二つのことをお聞きしたいと思いました。

【図書館長】

中高生の居場所を始めて、図書館員との関係性が変わったというのがあります。やはり話しかけるとか、逆に、例えば受験勉強している子が「合格発表があったら報告に来ますね」と言ってくれるとか、それは今までなかったと思うのですよね。ここで勉強している子が図書館の職員にお礼を言いに来てくれる、そんな発言があったり、何かその関係性が非常に変わったと思います。

だからこちらからもあまり突っ込まない程度で、学校の様子だとか、理系なの、文系なの、という話や会話することで関係性は深まってきているので、それが今後どういう形になるのかわからないですが、いい関係になっているのかなと思います。

見ていると、ここで受験勉強をしている子も、本を読みに行ったりもしているのです。本を読んだり、リラックスしたりするし、必ずしもそこにいるわけではなく、フロアの方に行って、本を読んでいるなど、そういう動きがあるので、必ずその子がずっと受験勉強だけをしているかということ、そうではないというのが、見えてきたのです。今まではそういう形で子どもたちを見てないですから。

ここに居場所で関わることによって子どもたちの様子が見えてきたということは、これは少し関係性が変わってきたのかなというのと、図書館職員としての意識も子どもたちを見る目が変わってきているのかなというのがあります。

例えば、12月には寒かったので、温かい飲み物を出したり、たまにお菓子を出したりしているのですが、「図書館でこんなことしてくれるんだ」と子どもたちが恐縮しています。やはり受験生向けに、ちょっとした受験生向けの験担ぎのお菓子を入れてあげたりすると、子どもたちはすごく喜んでくれ

ます。

だんだん親しくなっていますので、例えば何か騒いでいても「ちょっと静かにしてね」と声をかけやすいです。例えばここは金曜日の午後にやっていますが、子どもたちの様子で、金曜日以外にも臨機応変に開けるのですが、騒がしかったら「こっちに来て」「こっちで勉強して」という声がかかけやすくなりました。

あと本の貸し出し状況ですが、数値的には若干増えているのですが、必ずしもこの居場所のせいかどうかはちょっとわかりません。

ただ何かそんな子どもたちの様子が、もしかしたらかわりを通して見る目が変わってきているからかなと思います。

【町長】

では、吉澤委員さん、図書館関係にも関わっていただいていたと思いますが。

【吉澤委員】

今町長がおっしゃいましたように図書館には長い間少し関わらせてもらっていたのですが、この図書館も、できた当時とまた社会の情勢も変わってきました。確かにできた当時は、静かな読書の環境を大事にされていたのかもしれませんが、今おっしゃったように世の中も変わって図書館の役目も変わっていくので、この答申に出されたような方法や、また館長発表の事業を活かしていく、こういうような役割を図書館が担うというのは時代の流れだと思いますし、私はこの方向がいいのかなと思っています。

図書館も、静かに本を読むだけ、また本を借りるだけではなくて、「本がある交流できる場所」というか、そういうふうな捉え方の方がいいのかなと思います。

以前にもいろんな利用者さんの声として、「コーヒーを飲めるところがあったらいいのにな」というような声もあって、読書をして、ちょっと一息つきたいなというときに、同じ建物の中にこういうのがあるといいのかなと思います。

そうすると、さきほどの若者交流でも、本を読むところはある程度静かにしてないといけないかもしれませんが、ちょっと読書に飽きたり、友だちを見つけたら「ちょっと喋れる場所に行って喋ろうか」や、そこでちょっと喋って、また読書に戻ったり、そういう感じで過ごせる空間が確保できるといいのかなと思います。

関心があって、いろんなところの新しい図書館を調べてみると、図書館単独館で建っているところもありますけれども、意外に大都市で複合施設の中に図書館が入っていて、図書館にも寄るけれども、何か他のところにも行くというような感じで、それこそ交流…人がいろいろ行き来できるような場所に図書館があるというか、また図書館を核としてそういう場所を作っているというか、ネット情報ですがそういうところも増えてきているというように紹介されていたので、ここの図書館もすごく役割が多くなっていきますけれども、そういう方向をめざしてもらえたらいいかなと思っています。

それを実現していただくに向けては、町長にお願いしておかないといけないのですが、お金がやはりいりますが、例えば、さっきの若者の居場所でも、先ほどソファみたいな物の写真もありましたけれども、あのぐらいあってもいいのかなと思います。くつろげる場所は常設でできたらさらに良いかなと思います。

一朝一夕にはできませんけれども、さらにはコーヒーが飲める場所もあったらいいのかなというのが一つと、もう一つ、半分期待も込めてですけども、こういうふうに図書館がたくさんの機能を担うようになってくると、職員の方も今の人数で回りきれないでしょうから、いろんな仕事をされる専

門性を持った図書館の職員の方を増やしていかないといけないのかなと思います。そういう人事の方も練っておいてもらわないといけないのかなと思いました。

【町長】

館長、どうですか。

【図書館長】

そうですね。なかなかコーヒーを常時提供するというのは、この今の施設のなかでは難しいのかなと思いますけど、若干イベント的になるとは思いますけど、やってもいいのかなという気はします。

前はここ視聴覚室と、蓋つきであれば、（本のある）あちらでもいいということでやりました。

【町長】

それなら行きますよね。私たちも、カフェでコーヒーを飲みながら会議などしたら、皆喜ぶと思いますね。

【図書館長】

子どもたちも、ドリンクサーバーがほしいと言っていました。

【村井委員】

認知症会議でもここを使いましたよね。別のところではコーヒーのサーバーがあったのですが、ここはないのでなしでやっていますが。

【吉澤委員】

全然観点が違うのですが、やはり図書館があるというのは、その町の、ある意味文化的なレベルを示すというか、滋賀県は合併前の市町にも図書館ができていましたよね。良いと思っていましたが、やはり大事なもので、大事にしていかなければならないし、さらに発展していったほしいと思っています。日野町の様子を見ると、周辺の旧の村といいますか、周辺の地域は人口が減っているというのと、若者が少ない、高齢の方が残されているという状況があります。そのなかで、この図書館は、こういうネットの時代でもありますけれども、車も乗ることが大変な方などは、図書館に足を運ぶということがなかなかできないので、この図書館ができたときは、ゆくゆくは移動図書館を作ったということだったのでしょうか、今それが求められているかどうかは別なのですが、周辺地域にこの図書館サービスをいかに届けるかというのは一つのこれから先の課題かと思っています。

例えば、今ある公民館にもう少し図書館が入り込んで、例えば週の、何曜日の午前中は、公民館に行ったら図書館の人が来てくれているとか、ある程度常設的な形で図書館サービスが地域の方にも、周辺地域の方にも届くようなアイディアを出してもらいたいと思います。

日野の人口も、真ん中の日野小学校区にどんどん集まってきているような傾向があって、周辺部が取り残されているのですが、やはりその辺を心配していますが、何とか良い案があればいいなと思っています。

【図書館長】

公民館での本の貸し出しはしています。図書館から持って行って、そこで読んでもらっています。あとは定期的に更新して取り替えています。

【村井委員】

竜王小学校に行っていたのですけれど、月1回だったか、休み時間に図書館が本を持ってきてくれます。だから、図書館までは行けないけど、学校に図書館が来てくれるので、図書館員さんも子どもが好きそうな本を選んで、そこから借りていくと。返却は次回に来られたときに回収されていて、子どもたちが喜んで行っていたのですけれど、そういうのはありますか。

【図書館長】

学校には行っていません。学校は基本的に学校図書館です。

【町長】

竜王の小学校は、学校の図書室もあるけれど、こういうことをやっておられるんですね。

【村井委員】

はい。すごく面白いと思います。

【吉澤委員】

今のお話を聞いていて思ったのですが、さっき言いましたように高齢者を含めた地域住民の人たちの図書館サービスとして、週の何曜日の午前中はどこどこ公民館へ行ったら、図書館の方が来てくれて本を持って来てくれる、そういうので、さらに今、図書館員の方が一緒に来ていらっしゃるということですが、例えば半日間ほどは、図書館の職員の方もずっと居ていただいて、単に本を貸してくれるだけではなく、本の相談というか、レファレンスサービスも含めて出前してくれるとか、「こんな本を読みたい」と言ったら、「来週のときに持ってきます」など、そういうような形で人と人との、人を介したサービスというか、そういうのも合わせて出前してもらえるようになるのかなと思います。高齢の方をイメージしながら話しているのですけれど。

高齢の方は結構気長に待ってくれると思いますので、「来週用意してきます」を楽しみに待っていただけるかもしれないですし、また逆に、若い子育て世代のお父さんお母さんでも、「こんな本を子どもに読んであげたい」とか、そういうのとかでも対応してもらえるかもしれないですし、そういう図書館員さんも含めた出前みたいな、一定時間そこに滞在してもらえるような仕組みがあるといいですね。

【町長】

本だけではなくて、ですね。

【吉澤委員】

はい。ただ、どれだけ需要があるかわかりませんが、続けてもらったら、だんだんと浸透していくかもしれません。

【村井委員】

守山の県立病院では、隣が守山の図書館だったので、本の貸し出しに来てくれました。玄関ホールの隅に本を並べて、臨時的図書カードを作ってくれて、入院しておられる人限定ですが、本が何冊か借りられて、読んだら返却ボックスに返すということがあり有り難かったです。

【町長】

皆さんの話題も尽きませんけれども、教育長、まとめていただければと思います。

【教育長】

大事なキーワードを多くもらったのではないかと思います。誰1人取り残されないというのは、他のところでもいろいろと言われているところなので、図書館はまさにそうだなと思って、子ども、若者、成人、高齢者、やはりすべての人にとって居場所になるということを意識して、いろいろやってくださるということは、とても大事だなと思いました。そういうなかでやはり司書さんが、情報と人を結びつけるという、人と人とを結びつけていくということで、いろいろと動いてくださっているのだなということを感じました。

図書館クラブの取り組みは、館長がいろいろとしてくださったのですが、今までそういうところに視点が当たってなかったところを改めて感じました。何人ぐらい来ているのですか。

【図書館長】

今は、6人ですね。1人増えたのです。12月の謎解きイベントをしたときに参加した子どもで、「この図書館クラブって楽しいんじゃないかな」ということで、1人応募されました。

【教育長】

やはり活動内容を見てだんだん人が集まってくるのですね。中学生と高校生の内訳はどうですか。

【図書館長】

そうですね、今は中学生がいないのです。今は5小学校5、6年、高校2年です。その6年生が、今度中学生になるので、また引き続きクラブ員になってほしいのですけれど。

【教育長】

男の子と女の子の内訳はどうですか？

【図書館長】

小学生は全部女の子です。高校生は男の子です。その男子高校生は、優しくてすごく面倒見がいいんですよ。自分の意見より、まず小学生の意見を聞いて、自分がまとめるのです。

【教育長】

私もまだ一度も様子を見に行けていないので、また行かせてください。

それから図書館が勉強の場所になるということは別に構わないですか。

【図書館長】

全然構わないです。

【教育長】

テスト前からしっかり勉強している姿を見かけますし、大変ありがたいですし、そういうところでやはり司書さんたちとの関係性ができてきたということが大変嬉しいですね。決して追い出すのです

のではなく、相談にのったり、色々と声かけができるというのはありがたいなと思いましたし、これからそういうつながりを大事にしてほしいなと思いました。

そして、読み聞かせをしていくということは、やはり大事ですね。保育園、幼稚園とそこも本当に大事ですね。小学校までがやはりポイントだなと思います。寝かしつけのグッズとして読み聞かせをするというような、そういう習慣づけをしていかないといけないですね。

【図書館長】

図書館の本もいいのですが、図書館としては、家に本を持ってほしいと思います。やはり家庭で買って、本がある家庭というか、生活を子どもたちにしてほしいので、図書館の本を見て、その中からお気に入りの1冊か2冊を選んで買ってほしいと思っています。

【教育長】

学力学習状況調査の質問紙に、家にある図書の冊数と、学力との関係を調べているデータもあるんですよ。

【町長】

一応相関関係がありますよね。

【教育長】

関係があるんですよ。やはりどういうふうな環境のなかで育っているのかで違うということだと思います。

うちも毎晩、孫がやってくるのですが、先ほどのボードゲームやトランプゲームをするとか、そういうゲームをするようなことも、やはり人と人との関係ですし、絵本を読むということも人相手のコミュニケーションで必要なこともあって、そういうふうな動きを作り出していくということは、これは学校教育の課題でもあるし、社会教育の課題でもあると思います。

コーヒーのサービスや、図書館をサロンのようにというところで、私が学校に行っていたときは、図書室は学校にとって、人と人とをつなぐサロンだとかなり意識していました。

参観日のときには図書室で、コーヒーサービスをしたことがありました。参観のあとに、保護者が図書室に集まってコーヒーを飲みながら、親御さん同士がつながっていくという、そういう一つの仕掛けだと思うのです。人と人がつながる、つなげるという一つの仕掛けが大事ななというふうにも思いながら聞かせていただきました。図書館がキースタジオになる、そんな館長の熱い思い入れが大変嬉しいなと感じました。

【町長】

ありがとうございました。

皆さん、今日はお疲れのところ、本当にありがとうございました。前向きな可能性のあるテーマだと思いますので、これからもどうぞ、宜しくお願いします。

【企画振興課長】

以上をもちまして総合教育会議の方を閉じたいと思います。

皆様ありがとうございました。